『長秋詠藻』評釈（3）

Notes on "Chōsyū Eisō" (3)

檜垣　孝

Takashi Higaki

〔要旨〕

藤原俊成の私家集『長秋詠藻』全歌の評釈。（その3、三七四番から三八七番。）

評　釈

故左の大臣の仁和寺の徳大寺の堂に、上西門院前の斎院と申(し)し時の女房あまた渡りて、歌ども詠みおかれたりけるを、後に見出でて、その返しせよと、大炊御門右大臣右大将(の)時のありしかば、書き添へつゝ遣はしける歌ども

374　おく霜も君がためにと心して盛り久しき宿のむら菊

【題意】 今は故人の左大臣（藤原実能）が仁和寺内の徳大寺の仏堂に、上西門院（統子内親王）が前の斎院と申し上げていた時にお仕えしていた女房達がたくさん行き集って、歌を詠んであったのを、後に発見して、（贈答歌の贈歌と見立てたのでしょう）それらの歌に対して私（俊成）に返歌をするようにといって、その頃は右大将であった大炊御門右大臣（藤原公能）が送ってよこしましたので、それぞれの歌に対して返歌を詠み、それを書き加えて送り返した歌の意。この詞書は、三七四番から三八七番までの十四首の贈答歌全体にかかり、文末の「遣はしける歌ども」の後に、三七四番歌の題として「その女房の歌の第一首」といった意の文が省略されている。

【作者】 作者名は記されていないが、詞書によって女房の中の一人の作であると知れる。

【歌意】 菊に置くはずの霜もあなたのために遠慮をしてあまり置かないので、花盛りが長く続いているこの家のたくさんの菊ですね。

【語釈】 **◇故左の大臣** 今は故人の左大臣。藤原実能（一〇九六～一一五七、六二歳）。実能は、正二位権大納言藤原公実の四男。母は藤原隆方女従二位光子。保安二年（一一二一）二月二十九日従三位、同三年十二月十七日権中納言、久安六年（一一五〇）八月二十一日内大臣、保元元年（一一五六）九月十三日左大臣、同二年（一一五七）正月二十四日従一位に至るが、五月二十六日に上表して左大臣と兼任していた春宮傅を辞す。但し、留保されたまま七月十五日に病により出家、九月二日に入滅。仁和寺内に堂を建てて住み、世に徳大寺左大臣と称した。徳大寺家の祖（『公卿補任』『尊卑分脈』）。古典大系『長秋詠藻』の頭注では「故左大臣」を藤原実定とするが誤り。[1] 和歌大系『長秋詠藻』は実能とする。 **◇仁和寺** 京都市右京区御室大内にある真言宗御室派の総本山。山号は大内山。御室御所とも仁和寺門跡ともいう。光孝・宇多天皇の二代により仁和二年（八八六）から同四年（八八八）にわたって造寺が進み完成したので仁和寺と名づけられた。本尊は阿弥陀三尊。 **◇徳大寺の堂** 徳大寺の仏堂。徳大寺は、藤原実成（九七五～一〇四四、七〇歳）が衣笠山の麓に山荘を持ち寺院を営んだのに始まる。その寺地は仁和寺の境域内にあった円融天皇の御願寺円融寺に重なる。これを伝領した実能もここに別荘を営み、仏堂を建てて徳大寺殿と称された。室町時代の長禄二年（一四五八）に細川勝元が徳大寺公有から譲り受け別荘とし、傍らに竜安寺を創建して現在に至っている。[2] 和歌大系『長秋詠藻』は仏堂を「或いは菩提院か」とする。[3] **◇上西門院前の斎院と申（し）し時の女房** 上西門院（統子内親王）が前の斎院と申し上げていた時にお仕えしていた女房達。上西門院は、鳥羽院皇女統子内親王（一一二六～一一八九、六四歳）。初名は恂子、後に統子と改名。母は待賢門院璋子。大治二年（一一二七）二歳で斎院に卜定、天承二年（一一三二）六月二十九日病によって退下。保元二年（一一五七）八月十四日入内し、翌三年（一一五八）二月三日弟の後白河天皇の准母として皇后となる。平治元年（一一五九）二月十三日院号を賜り上西門院と称す。永暦元年（一一六〇）二月十七日出家、法名真如理。文治五年（一一八九）七月二十日入滅。[4] 女房は上西門院付きの女房。上西門院付きの女房には歌人が多く、森本元子氏『私家集の研究』によれば、兵衛、武蔵、冷泉、大弐などが知られる。中でも上西門院兵衛は『千載集』以下の勅撰歌人として歌会に活躍していて著名。その他に、

美濃（讃岐）、六角の局なども女房として知られる。[5] **◇後に見出でて**　後に発見して。発見したのは大炊御門右大臣。大炊御門右大臣は故左大臣（藤原実能）の子の藤原公能。　**◇大炊御門の右大臣**　藤原公能（一一一五～一一六一、四七歳）。藤原実能の一男。母は権中納言藤原顕隆女。保延四年（一一三八）十一月八日参議、永治元年（一一四一）十二月二日権中納言、同日従三位、康治元年（一一四二）十一月十四日正三位、久安四年（一一四八）七月十七日正二位、保元元年（一一五六）九月八日右大将、同二年八月十九日権大納言、永暦元年（一一六〇）八月十一日右大臣に至る。なお、右大将は終生兼任している。応保元年（一一六一）八月十一日薨（『公卿補任』『尊卑分脈』）。大炊御門は、大炊御門大路の北、高倉小路の東にあった公能の邸宅（『山槐記』応保元年八月十一日条）。現在の京都市中京区坂本町のあたり。　**◇右大将（の）時**　その頃は右大将であった。公能が右大将であった期間は、保元元年（一一五六）九月八日から応保元年（一一六一）八月十一日の没年までであるが、右大臣就任以後は右大将であることはあまり重要ではないとすれば、永暦元年（一一六〇）八月十一日右大臣就任までの間ということになる。但し、俊成に返歌を依頼したのは実能が没した保元二年（一一五七）九月二日以後である。　**◇返しせよと**　私（俊成）に返歌をするようにと。公能が俊成に返歌を作らせたのは、公能に俊成の妹豪子が嫁しているという縁故によるものと考えられる。俊成は後に公能と豪子の子実定から皇后宮大夫の職を譲り受けることになる。　**◇書き添へつゝ**　（それぞれの歌に対して返歌を詠み、それを）書き加えて。　**◇遣はしける歌ども**　送り返した歌。「ども」は接尾語。女房達の歌七首と俊成の代作歌七首の合計一四首をさした複数の意を表す。　**◇おく霜**　菊に置く霜。　**◇心して**　注意して。語法的には初句「おく霜の」に帰って掛かってゆく。注意して置くということだが、ここでは結果的に遠慮をしてあまり置かないのでという意と同じ。「菊」「霜」との取り合わせで「心して」という語が詠み込まれた先行歌として、『続後撰集』巻第二十賀歌に入集している、

天暦七年十月、后の宮の御方に菊植ゑさせ給ひける日、上のをのこども歌つかうまつりけるついでに　天暦御製（村上天皇）

心して霜の置きける菊の花千世に変はらぬ色とこそ見れ（一三四六）

と、治暦二年（一〇六六）九月九日の庚申に行われた「禖子内親王家歌合」の、

長月の長きためしの菊の上に心して置け夜半の初霜（菊題・四番右、八）

がある。　**◇宿のむら菊**　むらがって生えている宿の菊。『経信母集』に、

九月九日、籬の菊の面白き色に、人来て見る

錦してめぐる籬と見るまでに目も彩なりや宿のむら菊（二）

という作があり、『堀河百首』秋廿首中の「菊」題に、

たれと我庭にたはれんませ結ひし宿のむら菊花開きにけり（八三八、顕仲）

という作などがある。

【評】贈答歌の贈歌、一首目。女房が、徳大寺に咲いている菊の花の美しさが長く続いているのは、菊に置く霜が実能に遠慮をしてあまり置かないからだと詠むことで、実能の威徳を讃え、あわせて実能の長寿を寿いだ歌。

この贈答歌が成立した時期については、松野陽一氏『藤原俊成の研究』が田村悦子氏の説を紹介しながら古典大系『長秋詠藻』の誤りを正されていて簡潔である。氏は、

「故左大臣」は、保元二年九月二日に薨じた徳大寺実能（日本古典文学大系所収長秋詠藻の頭注「実定」は誤り、その他の点でも田村悦子氏「藤原俊成の書状及び仮名消息の研究」美術研究197 昭和33・3の考証が正確である）。その実能が建てた徳大寺に、上西門院（鳥羽院皇女恂子。母の待賢門院璋子は実能の妹、つまり実能は恂子の伯父に当る）が前斎院と呼ばれていた折（天承二年斎院退下の時から、保元二年八月十四日入内するまでの間）に仕えていた女房達が集って歌を詠じた。その歌が実能没後、実能の子の公能によって見出され、顕広に返歌を付すように依頼があった。その依頼があった時に公能は右大将（保元元年九月～永暦元年七月）であった、という内容であろう。女房達が歌を詠んだのは、上西門院が前斎院と呼ばれていた保元二年八月以前の初冬（七首の歌材から推定。古典大系の「秋」は誤り）のことで、顕広の返歌は、実能没の保元二年九月二日から、公能が右大臣に転じた永暦元年七月の間となる。[6]

と解説されている。俊成が女房達の歌に返歌をする形で贈答歌が成立した時期は、実能が没した保元二年（一一五七）九月二日以後、公能が右大臣に任ぜられる永暦元年（一一六〇）八月十一日までの足かけ四年の間ということになるが、松野氏は更に、

女房の詠作の時期と顕広の返歌の時期は、さほど離れていないようにも思える。実能没後の整理からでてきた歌稿となれば、それ程日時を経ぬ頃のことであろうし、極端には、前者が保元元年初冬、後者が翌二年の同じ初冬の頃、前記消息が翌三年春、というような可能性さえある。[6]

と述べられ、俊成の返歌を実能が没した保元二年の初冬の頃という一年に限定するという推定をされている。保元二年は俊成四四歳の年にあたる。

375 返し

千世までも匂はむ宿の菊なれば心長くを人も来て見よ

【題意】返歌。

【作者】作者名は記していないが、三七四番歌の詞書によってわかるとおり作者は俊成である。

【歌意】千年の後まで美しく咲きほこるはずの我が家の菊なので、花盛りの長いこれらの花をあなたも来て見て下さい。

【語釈】◇**匂はむ宿の菊**　美しく咲きほこるはずの我が家の菊。「匂ふ」は、ここでは色彩的な美しさを指している。「む」は適当・当然を表す助動詞「む」の連体形。　◇**心長くを**　花の盛りの長いこれらの花を。『為忠家初度百首』秋歌部の「古砌菫菜」題歌に、

故郷を尋ねてみれば庭もせに心長くも菫生ひけり（一一一四、頼政）

という作を見出すが、花が長い期間にわたって咲いている状態を詠んでいる点で俊成歌に共通し、俊成も『為忠家初度百首』の詠者の一人であるので、何らかの印象が残っていてこのような表現をとらせたかと考えられる。◇**人も来て見よ**　あなたも来て見て下さい。「人」は直接的には三七四番歌の作者の女房を指すが、徳大寺にやってきた複数の女房達をさしてると考えてよい。「来て見よ」は、命令形であるが現代語訳では丁寧に訳した。

【評】贈答歌の答歌、一首目。実能が自ら造営した徳大寺のすばらしさを我褒めした歌。

本歌は俊成が公能の要請によって、故人実能の立場になり代わり返歌したものなので、徳大寺を造営した実能を褒める俊成の意識の投影が我褒めという表現をとらせたと理解できる。その点、贈答歌の返歌としては贈歌への切り返しは少ない。松野陽一氏『藤原俊成の研究』は、

顕広の方は実能への哀悼の意をこめてか、やや懐旧的もしくは釈教歌的な作品となっている。公能の依頼の意図にも、風流韻事の意識の一方で、父への菩提といった心情が働いていたかと思われる。義兄顕広の存在は一族の縁で、恰好な依頼の相手であったのだと思われる。[7]

と評されている。十四首の贈答歌群全体への評ではあるが、当該歌にも実能を褒める俊成の意識の中に何がしかの哀悼の意は認められるとすべきであろう。贈歌の「宿のむら菊」を「宿の菊」とし、「心して」「盛り久しき」を「心長くを」と変形させて返歌に利用している。

又女房の

376　花は枯れ紅葉散りぬる折しもぞゆき見まほしき冬の山里

【題意】又、女房の歌。「女房の」の後にあるべき「歌」の文字が省略されたもの。

【作者】女房。

【歌意】花が枯れ、紅葉も散ってしまった折も折、今は、行って雪の景色が見てみたいと思うあなたの家の冬の山里ですよ。

【語釈】◇**花は枯れ紅葉散りぬる**　花が枯れ、紅葉も散ってしまった。『西行法師家集』の「冬の歌どもよみ侍りしに」と題する一連八首中の第一首、

花も枯れ紅葉も散りぬ山里は寂しさを又とふ人もがな（三〇一）

と同発想の句形である。[8]　◇**折しもぞ**　折も折、今は。「しもぞ」は、強意の副助詞「し」、感動の係助詞「も」、強意の係助詞「ぞ」が連ねられたもので、全体で強意を表す。　◇**ゆき見まほしき**　行って雪の景色が見てみたいと思う。「ゆき」に「行き」と「雪」を掛ける。　◇**冬の山里**　あなたの家の冬の山里ですよ。想像した景色としての冬の山里というのではなく、実景として眼前にある冬の山里、つまり徳大寺の庭、あるいはその築山あたりをさしていった語。

【評】贈答歌の贈歌、二首目。徳大寺の庭に広がる冬の山里の景色の素晴らしさを想像して褒めた歌。

女房達が集っている今は徳大寺の紅葉が散ってしまったちょうど初冬で、あるいはまだ雪の景色にはなっていないかとも思われるが、この季節には雪の景色が見てみたいと思う女房の素朴な気持ちが詠まれた歌と理解できる。

冬の季節は、和歌史的には『後拾遺集』時代までは春秋に比して歌数は少ないが、『金葉集』以後になると徐々に歌数も増え、美的なものとして受け止められ詠まれるようにもなってゆく。[9]この歌を含め以下の四首は、徳大寺を褒めるという意識が働いたがために冬の景を好もしいものとして詠んでいるのではあるが、和歌史的には如上の位置づけの中にある歌と見ることができる。

返し

377　折りにつけあはれを添ふる山里は雪降るまゝを思ひおこせよ

【題意】返歌。

【作者】 俊成。

【歌意】 それぞれの季節毎に趣深い様を添えるこの山里です。冬になった今は、雪の降る様子そのままを想像してみて下さい。

【語釈】 ◇**折につけ** それぞれの季節毎に。 ◇**あはれを添ふる** 趣深い様を添える。『源氏物語』「夕霧」巻に、

山里のあはれをそふる夕霧にたち出でん空もなき心地して（五二六、夕霧）

という歌がある。 ◇**雪降るままを** 雪の降る様子そのままを。「雪降るまま……」という表現は、『兼輔集』（八二）、『隆信集』（八一四）、『式子内親王集』（六八）などに見られるが、『式子内親王集』の、

思ふより猶深くこそ寂しけれ雪ふるままの小野の山里（六八）

が最も俊成歌の内容に近似している。 ◇**思ひおこせよ** 想像してみて下さい。「思ひおこせ」は、動詞「思ふ」と「起こす」の複合語で命令形。「起こす」は、ここでは動詞「思ふ」に刺激を与えて活動させる語として利用されている。「よ」は相手に呼びかける意を表す間投助詞。「思ひおこせよ」の用例として早いものに『元真集』の、

逢ひ見ても千々に砕くるたましひのおぼつかなさを思ひおこせよ（二四一）

を見出すことができる。

【評】 贈答歌の答歌、二首目。趣深い徳大寺の雪の景色を想像させ、見に来てほしいと呼びかけ依頼した歌。

贈歌が雪の景色が見てみたいと詠んでいるのに応じ、我が宿の雪の景色は趣深いものだから見に来てほしいと答えたのである。但し、上三句にそれぞれの季節毎に趣深い様が我が宿にはあるのですよという切り返しも込められていて、そこに返歌としての意義も認められる。古典大系『長秋詠藻』は「『あはれ』に俊成の風格が見られる。」と注する。贈歌中の「をり」「山里」「雪ふる」を利用。

又

378 **風寒（さむ）み紅葉（もみぢ）残（のこ）らぬ木（こ）の本（もと）も花見（はなみ）し春（はる）に劣（おと）らざりけり**

【題意】 又、女房の歌。「又女房の歌」とあるべきところであるが、「女房の歌」を省略して「又」とだけ表記したもの。以下の和歌の詞書「又」

も全て同じ。

【作者】 女房。

【歌意】 風が寒いので紅葉も残らず散ってしまった木の本ですが、この木の本の有様も花見をした春に少しも劣らず趣があるものだったのだなあ。

【語釈】 **◇花見し春に** 桜の花見をした春に。「花みし春」の語は『肥後集』の、

四月ついたち、ほととぎすを聞きて

夏の夜の山ほととぎす聞きながら花見し春を忘れやはする（五九）

や、『今撰集』春部の、

年頃もろともに花見る友達の、花見にゆくと聞きて、遣はしける　大夫典侍

いかばかり誘はぬ人を恨みまし花見し春の心なりせば（二四）

などが当該歌より早いものとしてあり、同時代の作として、『山家集』上巻に、

山寺の花、盛りなりけるに、昔を思ひ出でて

吉野山ほきぢ伝ひに尋ね入りて花見し春はひと昔かも（九六）

があるが、概して数少ない表現である。　**◇劣らざりけり** 少しも劣らず趣があるものだったのだなあ。冬の景が春の花の景にも劣らず素晴らしいと詠む歌に、『拾遺集』巻第十七雑秋の、

高岳相如が家に、冬の夜の月面白う侍りける夜、まかりて　元輔

いざかくてをり明かしてん冬の月春の花にも劣らざりけり（一一四六）

という歌があり、当該歌への影響が考えられる。

【評】 贈答歌の贈歌、三首目。徳大寺の庭では紅葉が散ってしまった木の本の有様も、春秋の趣深さに劣らないのだなあと徳大寺を褒めた歌。

紅葉が木の本に散るという発想の歌は、『古今集』巻第五秋歌下の、

雲林院の木の陰に佇みて詠みける　僧正遍昭

わび人のわきて立ちよる木の本は頼むかげなく紅葉散りけり（二九二）

や、『後撰集』巻第七秋下の、

紅葉の散り積もれる木の本にて　読人しらず

紅葉ばは散る木の本にとまりけり過ぎゆく秋やいづちなるらむ（四三八）

など多く見られるが、紅葉が散ってしまった木の本が冬の景色として趣があると詠む歌は少なく、『堀河百首』「九月尽」題の一首、

紅葉ばの散りて積もれる木の本や暮れゆく秋のとまりなるらん（八六九、顕季）

のように秋の名残がそこに行き着くといった発想で詠まれることの方が多いように思われる。わずかに、『貫之集』第一に収められた「秋」題の歌であるが、

紅葉ばの間なく散りぬる木の本は秋のかげこそ残らざりけれ（五五）

という作が、秋よりも冬の方に視線が向けられたものとして見出せる程度である。当該歌もまた徳大寺を褒めるという意識が働いたがために冬の景を良しとした歌と見ることができよう。

和歌大系『長秋詠藻』は、先述した『拾遺集』一一四六番歌を参考歌としてあげ、「空虚な冬の寂寥感を、一種の美として受け止める。」と解説する。但し、「木の本」に趣があるというのはどういうことであろうか。俊成の返歌（次歌）も同様に「木の本」を褒めているので、冬の美一般というより「木の本」という限られた景に集中しているようにみえる。あるいは、三六七番と三六八番が「冬の山里」の雪の景を主とした贈答であったので、視点を移して「木の本」の雪の景を連想しての贈答歌となったとは考えられないか。

返し

379　花の春紅葉の秋にあらぬ間もたゞには見えぬ木の本ぞこれ

【題意】返歌。

【作者】俊成。

【歌意】花が咲き乱れる春や紅葉が照り映える秋といった季節でない時、即ち冬の季節でも、平凡には見えないのがここ我が家の木の本ですよ。

【語釈】◇**花の春紅葉の秋**　花が咲き乱れる春や紅葉が照り映える秋。当該歌よりやや後の作であるが、永暦元年（一一六〇）に藤原清輔が主催した「太皇太后宮大進清輔朝臣家歌合」の廿三番「雪」の右歌に、

花の春紅葉の秋もしるかりし松の梢も見えぬ白雪（四六、空仁）

という作がある。また、「文治六年（一一九〇）女御入内和歌」の「紅葉」題の一首に、

花の春あかず思ひし心こそ紅葉の秋も変らざりけれ（二〇三、三条実房）

という作も見出せる。作者は共に俊成と同時代人であるが歌としては俊成歌の方が先行していて、俊成歌の影響下にある作とすべきか、あるいは同時代的な発想表現とすべきか。なお、空仁の作は、『新古今集』異本歌（新編国歌大観本）に、第五句を「見えぬ雪かな」（二〇〇〇、空仁法師、題しらず）としてとられている。 **◇あらぬ間も** （花紅葉の盛りの頃といった）季節でない時でも。ここでは冬の季節を指す。「も」は感動の係助詞。 **◇たゞには見えぬ** 平凡には見えない。何となく趣がある。『道命阿闍梨集』中の贈答歌の答歌に、

故郷と思はぬ人の見るだにもたゞにはあらず宿の紅葉ば（二三五）

という作があり、『出羽弁集』中の贈答歌の答歌に、

妹背山たゞにはあらず埋もれ木の匂ふばかりの花ならねども（一五）

という作も見出せる。類想表現の句として俊成歌への影響を考えてよさそうである。後出の作としては、『宝治百首』の春廿首の中に、

逢ひに逢ふ野辺の草木の気色までたゞには見えぬ春の雨かな（三四四、真観）

を見出すことができる。 **◇木の本ぞこれ** ここ我が家の木の本ですよ。「ぞ」は強意の係助詞。「これ」は近称の指示代名詞。「木の本」を指す。

【評】 贈答歌の答歌、三首目。冬の季節でも我が家の庭は平凡ではないと我褒めをした歌。

当該歌は先述した貫之歌に近く、我が家の庭の冬の景色をさして素晴らしいといっているのである。贈歌中の語句としては「紅葉」「木の本」「花」「春」を利用しているのではあるが、「紅葉」は「紅葉の秋」に、「花見し春」は「花の春」に、「劣らざりけり」は「たゞには見えぬ」とや表現を変えて詠んでいるところに俊成歌の工夫がみえる。内容的には贈答歌というより唱和歌に近い。

又

380 水の上（みづうへ）の月に心のしみぬればとゞこほりつゝえこそ帰（かへ）らね

【題意】又、女房の歌。

【作者】女房。

【歌意】水に映った月に心が奪われてしまったので、心がそこにとどまったまま帰ることもできないでいます。

【語釈】**◇月に心のしみぬれば**　月に心が奪われてしまったので。「しみ」は動詞「滲む」の連用形で、心に強い印象を受けて深く感じるという意。また、「凍み」との掛詞となっている。　**◇とゞこほりつつ**　心がとどまったまま。「とゞこほり」は動詞「滞る」の連用形で、すっきりと事が運ばないという意。「つつ」は継続の接続助詞。ここでは、月に心が奪われてしまってそこに釘付けにされ、体もまた動けなくなってしまっている状態をさしている。「とゞこほり」の「こほり」に「氷り」を掛ける。同じ掛詞の用法を用いたものに、『後拾遺集』巻第十一恋一の、

　人の氷を包みて、身にしみてなどいひて侍りければ　　馬内侍

　逢ふことのとどこほる間はいかばかり身にさへしみて嘆くとかしる（六三〇）

や、『和泉式部集』の、

　雪の降る日

　身にしみてものの悲しき雪げにもとどこほらぬは涙なりけり（四七八）

などの先行歌がある。古典大系『長秋詠藻』は「とく氷りつゝ」と翻刻し、「早く水は氷ってしまって。『氷る』に『恋ふる』をかけるか。」と説明しているが、国文学研究資料館のマイクロフィルムによる底本の紙焼写真本では「とゝこほり」と訓めるので、底本のままとする。　**◇えこそ帰らね**　帰ることもできないでいます。「え…ず」の呼応で不可能の意を表し、強意の係助詞「こそ」は打消しの助動詞「ず」の已然形「ね」と呼応して係結びとなっている。

【評】贈答歌の贈歌、四首目。池水のある風景とそこに映った月に感動した気持ちを述べることで徳大寺を褒めた歌。

目を庭の前栽・築山から池水に転じ、そこに初冬の月が凍りつくように映っているのを眺め、その風景もまた心にしみると詠んだ歌。和歌大系『長秋詠藻』は『重家集』の、

　いかばかり月に心のすみければやがて帰らぬ人のありけん（六六）

を参考歌としてあげる。『林葉集』巻第三秋歌の、

　実家卿家にて、月歌人人あまた詠み侍りしに（四四五詞書）

　昆陽の池に月し宿れば眺めやる心も水の上にすみけり（四四七）

という作も、池水に月が映っているのを心がどう受け止めるかという点において当該歌に近い発想の歌であるといえる。

返し

381　冬の池(いけ)に影(かげ)をとめてもすまばこそ月にしみける心とも見め

【題意】返歌。

【作者】俊成。

【歌意】冬の池に姿をとどめ置いて住むのであるならば、確かにあなたは月に心が滲みたのだとも受取りましょう。

【語釈】◇**影をとめても**　姿をとどめ置いて。「影」は池水に映る人（女房）の姿。但し月光の意の「影」も掛ける。「ても」は接続助詞「て」と感動の係助詞「も」の連語。　◇**すまばこそ**　住んだならば。人が「住む」意に月の光が「澄む」意を掛ける。「こそ」は強意の係助詞で、末句「心とも見め」と呼応して係り結びとなる。　◇**月にしみける心とも見め**　月に心が滲みたのだとも受取りましょう。「しみ」は前歌と同様、「滲み」と「凍み」との掛詞。「とも」は引用の意を表す格助詞「と」と強意の係助詞「も」の連語。

【評】贈答歌の答歌、四首目。我が家の池水に映る月影に感動して住むのならば、あなたの心を信用いたしましょうと期待をよせた歌。

贈歌中の語句「月」「心」「しみ」を利用しながら、内容的には贈歌の確定表現「月に心のしみぬれば」「とゞこほりつゝえこそ帰らね」を受けて、本当にそうなのですかと疑いを挟み、池水に姿をとどめ置くようにこの徳大寺に住むのならば（「すまばこそ」）と仮定表現で応じ、さらに本当にそうならば信用いたしましょう（「月にしみける心とも見め」）と、やや相手をからかって見せた歌。実能の期待はこの徳大寺に住んでほしいというところにある。男女の贈答歌であることを強調・設定して返歌をした形の歌である。

又

382　曇(くも)りなく磨(みが)ける宿(やど)の池水(いけ)は塵(ちり)も迷(まよ)はぬ鏡(かがみ)とぞ見(み)る

【題意】又、女房の歌。

【作者】女房。

【歌意】曇ったところもなく磨きたてたこの家の池水は、塵が付いて曇ることもない鏡そのものだと思うことですよ。

【語釈】**◇曇りなく**　曇ったところもなく。　**◇磨ける宿の池水は**　磨きたてたこの家の池水は。「宿」は徳大寺を指す。「磨ける」は「宿」と「池水」のどちらに掛かるのであろうか。古典大系『長秋詠藻』は「曇りもなくみがいた宿の池の水は」と訳していて、現代語的な感覚では「宿」に掛かっていると理解しての訳であるようにみえる。和歌大系『長秋詠藻』は「みがける宿」の項を立てて「掃き清められている家」と説明している。「磨ける」が「宿」に掛かる形で用いられた先行歌としては、『栄花物語』巻第十八「玉の台」の、

曇りなく磨ける玉の台には塵も居難きものにざりける（一九二、かたのの尼君）

や、『金葉集』巻第二夏部の、

承暦二年内裏歌合に菖蒲を詠める　藤原公実

玉江にや今日の菖蒲を引きつらん磨ける宿のつまに見ゆるは（一三〇）

などがある。一方、「磨ける」が「池水」に掛かる形で用いられた先行歌としては、『栄花物語』巻第十七「音楽」の、

曇りなき鏡と磨く池の面に映れる影の恥かしきかな（一九〇、翁）

や、池の水を磨くと詠んだ歌として、『拾遺集』巻第四冬の、

廉義公家障子　元輔

冬の夜の池の氷のさやけきは月の光の磨くなりけり（二四〇）

という歌などを見出すことができる。作者の意図は徳大寺を褒めることにあり、家屋敷が磨き立てられているのでその池水もまた曇ったところもなく磨かれている筈だと解釈するのがよいか。但し、後述するとおり俊成の返歌では「池の鏡を磨きおきて」と表現されていて、曇りなく磨かれているのは鏡に見立てた池水であるとわかる。俊成は、内容不明瞭な当該歌をそのように方向付けをし、返歌を詠んでいるのであろう。**◇塵も迷はぬ**　塵が付いて曇ることもない。古典大系『長秋詠藻』は「塵も方々迷っていない」と注する。「迷ふ」の原義には近い説明であるが、結局は塵一つ付いていないという意になり、さらに次句の「鏡」に掛かるので「曇ることもない」と訳した。「塵もまよはぬ」という表現は当該歌以

前には見出せない。 **◇鏡とぞ見る** 鏡そのものだと思うことですよ。池水を鏡と見立てた。「ぞ」は強意の係助詞。「ぞ見る」で係り結び。

【評】 贈答歌の贈歌、五首目。徳大寺の池水を塵一つ無い鏡と見立てて、そのような美しい池のたたずまいを褒めた歌。

当該歌の作者の目も前の女房と同様池水にそそがれているが、月が凍りつくように映っていると詠んだ女房の歌にヒントを得て、池水を鏡と見立て「磨く」「塵」といった鏡の縁語を援用して一首を作り上げたところに工夫があるといえる。

返し

383 **嬉しくも池の鏡を磨きおきて人の心の程を見る哉**

【題意】 返歌。

【作者】 俊成。

【歌意】 池の鏡を磨いておいたおかげで、あなたの心の有り様を嬉しいことに映して見ることができましたよ。

【語釈】 **◇嬉しくも** 嬉しいことに。第五句「見る哉」に掛かる。何が嬉しいのかというと、相手の心の有り様を見ることができたからである。

◇池の鏡を磨きおきて 池の鏡を磨いておいたおかげで。徳大寺の池を鏡と見立てた贈歌を受けて、その鏡を塵一つない状態に磨いておいたと比喩的に表現したもの。俊成には後年の作であるが、

泥絵の御屏風和歌二首（六四九詞書）、冬池水に雪つもり水鳥あり

冬くれば池の鏡に氷ゐて磨き添へたる千代の影かな（新編大観『長秋詠藻』六五〇）

という歌がある。 **◇人の心の程を見る哉** あなたの心の有り様を嬉しいことに映して見ることができましたよ。「心の程」は、徳大寺の池のたたずまいを褒めた女房の心の有り様というほどの意。『俊頼髄脳』に、

垣越しに馬を牛とはいはねども人の心の程を見るかな（四二八、四条中納言）

という作があり、当該歌への影響が推測される。人の心の有り様を水に映して見ると詠む同発想の歌としては、『続古今集』巻第十八雑歌中に、

正治二年七月歌合に、水辺月　　西園寺公経

音羽川せき入れし水に影とめて人の心を月に見るかな（一六七九）

という作があり、これは当該歌からの影響が推測される。

【評】 贈答歌の答歌、五首目。池の鏡を塵一つない状態に磨いておいたのは、その鏡に映るあなたの心情を見てみたいがためであったのだよ、と宿の主人（実能）の心底を明かしてみせた歌。

女房が我が宿の池水を塵一つない鏡だと褒めてくれたことを、やはり嬉しいと思う実能の悦びを前面に押し出そうとして初句に「嬉しくも」と置いた、そこに実能に哀悼の意を表そうとする俊成の工夫がある。贈歌中の「磨ける」「池水」「鏡」を利用。

又

384 見る人のたつ空もなき宿なれば汀の鴛も住みなれにけり

【題意】 又、女房の歌。

【作者】 女房。

【歌意】 見る人即ち私達女房が立ち去りかねている家なので、汀に居る鴛鴦も住み馴れているのであったなあ。

【語釈】 **◇見る人** 見る人即ち私達女房。「人」は、自分一人（単数）ではなく他の女房達（複数）をも指す。 **◇たつ空もなき** 立ち去りかねている。「たつ」に、人が旅立つ意の「立つ」と鳥が飛び立つ意の「飛つ」を掛ける。古典大系『長秋詠藻』は「立ってゆく空もない宿、外にゆき所もない意か。」と注し、和歌大系『長秋詠藻』は「立ち去る気持もない。」と注する。「空」は、鳥などが飛び立ってゆく空をいうのが原義であるが、ここでは人が旅立ってゆく方向などを比喩的に表現しているものと思われ、「空もなき」で立ち去ってゆく先がないという意となる。またそれ故、立ち去りかねているという意にもなる。『後拾遺集』巻三夏に、

夏刈の玉江の蘆を踏みしだき群れ居る鳥の立つ空ぞなき（二一九、源重之、題しらず）

という歌が入集しているが、「立つ空ぞなき」に対する現代語訳として「飛び立つ空がないことだ」とするものと、「空に飛び立ちかねているよ」とするものがある。[10] **◇宿なれば** 家なので。「宿」は徳大寺を指す。 **◇鴛** オシドリ。鴛鴦とも書くが、鴛が雄、鴦が雌を意味する。日本に

広く分布するカモ科の水鳥。体長は四十五センチ前後。湖沼、河川などに住み、雌雄仲のよい鳥の代表として知られ「鴛鴦の契」「鴛鴦の衾」などの語がある。ここでは女房自身をも暗示。**◇住みなれにけり**　住み馴れているのであったなあ。「住みなれ」の「みなれ」に「水馴れ」を掛ける。「にけり」は強い詠嘆。

【評】　贈答歌の贈歌、六首目。自分たちばかりでなく水鳥も飛び立つことなく住み馴れている塵一つ無い美しい池を持つ徳大寺を褒めた歌。

この贈歌は、徳大寺の庭から池へ、池から汀へ、汀から鴛へと視点を移して詠んだもので、大きな景から小さな景へと向かう女房の視線を反映したものとなっている。

返し

385　世とともにみなれぞせまし水鳥（とり）の立（た）つ空（そら）もなき宿（やど）と思はゞ

【題意】　返歌。

【作者】　俊成。

【歌意】　この世がある限りいつも見慣れることになるでしょう。この家が水鳥のように飛び立ちかねる家だと思うならば。

【語釈】　**◇よとともに**　この世がある限りいつも。世と共にの意。『後撰集』巻第九恋一に、

世とともに阿武隈河の遠ければそこなる影を見ぬぞわびしき（五二〇、題しらず、読人しらず）

という作がある。　**◇みなれぞせまし**　見慣れることになるでしょう。「みなれ」は「見慣れ」の意。和歌大系『長秋詠藻』は「女房に向かって、この宿に足繁く通ってくれることを期待する。」と解説する。いつもこの徳大寺に来るようになればその結果として見慣れるようになるという期待を込めて用いた表現。「みなれ」に「水馴れ」を掛ける。　**◇水鳥の**　水鳥のように。「水鳥」は贈歌の「鴛」を受ける。また、女房を暗示。ここでも女房は三八四の作者一人ではなく、女房達皆を指している。

【評】　贈答歌の答歌、六首目。女房達に我が家にいつも通ってきて見慣れるほどになってほしいと期待をよせた歌。

女房が宿を褒めてくれたのに対し単純に礼を述べるのではなく、それならばいつまでも通ってきてほしいと更に新たな関係を求めた返歌といえ

る。

贈歌中の「立つ空もなき宿」はそのまま用い、「見る」を「見なれ」に「鴛」を「水鳥」に変化させて詠んでいる。

当該歌は、「水鳥の歌入消息」と名づけられた俊成自筆の消息文によって、女房へ贈った俊成の返歌であることが確認できる一首であるとされる。すなわち田村悦子氏は「水鳥の歌入消息」の内容を吟味され、

この消息の文中に、「且つそれへもすなわちかく候也」とあって、長秋詠藻のそれと同歌が書き込まれている処から、この手紙はその返歌をした当時の事情を物語っている。即ち俊成は求められた返歌は一括して使いのみめ美しい法橋某に渡し、その人から定めて各女房の方にも返歌を届けてくれるものとしていた所、届いていない様子なので貴女の分の返歌は「よとともに……」という歌ですよと、書き込んだものではないだろうか。[11]

と考察し、更に、この消息文の成立時期について、

そして歌を法橋に渡したのは文中、「こぞ」とあれば本消息は次年の春にでも七人の女房の中の一人に宛てたものと考えられる。即ち本消息は長秋詠藻に出る詞書の内容を裏付ける資料という事ができるであろう。すると本消息は俊成四五歳から四七歳の間の春の消息となろうか。[11]

と結論付けられている。

又

386　これやさは常(つね)にすむなる月ならむ鷲(わし)の御山(みやま)に入(い)る時もなき

【題意】 又、女房の歌。

【作者】 女房。

【歌意】 これがそれでは常に澄んだ光を投げかけているという月なのであろうか。この霊鷲山では、山に入り隠れるという時もないことだよ。

【語釈】 **◇これやさは** これがそれでは。「これ」は月を指す。 **◇常にすむなる** 常に澄んだ光を投げかけているという。「すむ」は「澄む」と「住む」との掛詞。「なる」は伝聞推定の助動詞「なり」の連体形。 **◇月ならむ** 月なのであろうか。月は澄んだ光を投げかける月であると同時

に、霊鷲山に澄む月であり、また同時に仏法を説いているという釈尊の象徴ともなっている。推量の助動詞「む」が眼前にはない霊鷲山の月を幻視していることを保証する。　**◇鷲の御山**　霊鷲山。仏教の聖地。釈尊の説法地の一つで古代インドのマガダ国の首都王舎城にある小高い山。徳大寺あるいはその庭の築山を聖地である霊鷲山に見立てて表現しようとしたもの。　**◇入る時もなき**　山に入り隠れるという時もないことだよ。「も」は感動の係助詞。「なき」は形容詞「無し」の連体形。

【評】 贈答歌の贈歌、七首目。眼前の月を霊鷲山の月（霊鷲山で説法をする釈尊）と想定し、仏教的雰囲気に包まれた徳大寺の空にかかる月は入る時もないと褒めた歌。

霊鷲山に月が常に澄んだ光を投げかけていると発想して詠むことは、早く『後拾遺集』巻第二十雑六釈教の、

寿量品　　康資王母

鷲の山へだつる雲やふかからん常にすむなる月を見ぬかな（一一九五）

という作に見られる。俊成には『長秋詠藻』に、

常にすむ　鷲の御山の月だにも思ひしれとぞ雲隠れける（八九、詞書「無常二首」）

という作がある。なお、

常にすむ鷲の御山の月影を忘れじとこそ世をば出でしか（『寂蓮法師集』、六五、静蓮、詞書「返し」）

常にすむ月の光ぞへだてなき鷲の御山も鶴の林も（『隆信集』、九四四、詞書「法花経」）

など、釈教歌が多く詠まれるようになる院政期以降には普通の表現として現出する。

返し

387　見る人の心に常にすみぬれば入る時もなし山の端の月

【題意】 返歌。

【作者】 俊成。

【歌意】 見る人（私）の心の中にはいつも清らかに澄んだ光を投げかける月が住んでいるので、山の端の月も入ることがないのですよ。

【語釈】 **◇見る人** 見る人（私）。「見る人」は自分自身（藤原実能）を指す。 **◇心に常にすみぬれば** 心の中にはいつも清らかに澄んだ光を投げかける月が住んでいるので。心月輪を指す。「すみ」は「澄み」と「住み」との掛詞。藤原実能が自分自身を我褒めする形であるが、代作者俊成の実能への敬意がこのような表現をとらせているのである。 **◇山の端の月** 山の端の月。この山は霊鷲山をも暗示する。

【評】 贈答歌の答歌、七首目。自らの心の内に澄む月すなわち心月輪は沈むことがないと、月輪観を根拠に我褒めをしてみせた歌。

贈歌中の「常にすむ」「入る時もなき」をほぼそのままに用い、「月」「鷲の御山」を受けて「山の端の月」と一つに表現し、贈歌が徳大寺に照る月を霊鷲山に照る月ですねと挨拶したのに対し、その月は私自身の心の内に澄む月すなわち心月輪なのですよと応じた歌。但し、初句「見る人」には藤原実能を指すとともに女房達をもさしていると広く解釈する可能性も残していよう。和歌大系『長秋詠藻』は、

仏語「月輪」に基く。衆生に本来具わっている心を、十方に遍く光明を放つ満月に喩える。また心を静寂にして、本心は清浄完全な満月と等しいと観ずる法を月輪観という。月を釈教上のものにとりなしたこの贈答は、徳大寺の宗教的雰囲気を背景にしている。

と解説されている。

前歌でも述べたとおり、俊成には『長秋詠藻』に、

常にすむ鷲の御山の月だにも思ひしれとぞ雲隠れける（八九、詞書「無常二首」）

という作がある。当該歌より七年ほど以前の『久安百首』中の一首であり、俊成自身の中に既に仏教的なものを志向する精神が強くあったといえるのではあるが、実能への追善供養的な意識がこのような実能の我褒めと思わせる歌を作らせたものといえよう。

以上、各一首ずつの検討を重ねてきたが、女房達の歌七首と俊成の代作歌七首を一まとまりの贈答歌群として眺めてみて、気付くこと、考えられることを簡単に記しておきたい。女房達の歌七首（贈歌）は、

①おく霜も君がためにと心して盛り久しき宿のむら菊（三七四）

②花は枯れ紅葉散りぬる折しもぞゆき見まほしき冬の山里（三七六）

③風さむみ紅葉残らぬ木の本も花見し春に劣らざりけり（三七八）

④水の上の月に心のしみぬればとゞこほりつゝえこそ帰らね（三八〇）

⑤曇りなく磨ける宿の池水は塵もまよはぬ鏡とぞ見る（三八二）

⑥見る人の立つ空もなき宿なれば汀の鴛も住みなれにけり（三八四）
⑦これやさは常にすむなる月ならん鷲の御山に入る時もなき（三八六）

で、俊成の代作歌七首（返歌）は、

⑧千世までもにほはむ宿の菊なれば心長くを人もきて見よ（三七五）
⑨折につけあはれを添ふる山里は雪ふるまゝを思ひおこせよ（三七七）
⑩花の春紅葉の秋にあらぬ間もたゞには見えぬ木の本ぞこれ（三七九）
⑪冬の池に影をとめてもすまばこそ月にしみける心とも見め（三八一）
⑫嬉しくも池の鏡を磨きおきて人の心の程を見る哉（三八三）
⑬世とともに見なれぞせまし水鳥の立つ空もなき宿と思はば（三八五）
⑭見る人の心に常にすみぬれば入る時もなし山の端の月（三八七）

である（便宜的に①～⑭の番号を付す）。

まず、贈歌七首について、これら七首をこのような順序に置いたのはやはり俊成であろうということが考えられる。女房達はそれぞれに関心の向かうところを詠んでいるのであるが、それを俊成が時間的空間的な配列に意を用いてこのような順序に並べたのであるといえよう。時間的には①の霜と菊の季節から②③の落葉[12]と雪の季節へ、さらに④⑤⑥の冬の池水も氷るほどの季節へといった、わずかな変化ではあるが時間の推移が読みとれるように配列されていると思われる。また、空間的には、女房の歌は徳大寺の庭を主として詠んだものであるが、①の「宿のむら菊」から②の「冬の山里」へ、「冬の山里」から③の「木の本」へというように、女房達の視線が狭い景から広い景へ、広い景から狭い景へと、完全に交互というわけではないが按配よく注がれていると思わせられるように配列されている。なお、④と⑦は月を詠んでいて並列させてもよいかとも思われるが、女房達の歌が徳大寺の仏堂での詠歌であることや故人実能への哀悼追善の意があることを重視すれば、仏教的な⑦が最後に置かれたことは頷けることである。

次に、俊成の代作歌七首（返歌）については、全体を通じて実能が詠んでいると思わせるよう配慮がなされていることに注目させられる。特に実能自身が自邸を褒める（我褒めをする）⑧⑩⑭などにそれは特徴的である。また、贈答歌の答歌らしい歌が多いが、なお⑩のような唱和歌的なものもある。答歌としての⑨⑪⑫⑬は、女房達が徳大寺を褒めてくれるのに対しそれを嬉しいと受入れながら、なお贈歌の意をずらして切返したり、期待したり、相手との関係を確認してみたりする贈答歌の答歌らしい歌として仕上げる工夫がされていて、それが俊成歌の見所にもなってい

るといえる。

注

(1) 田村悦子氏「藤原俊成の書状及び仮名消息の研究」(美術研究、197、昭和三三・三)、松野陽一氏『藤原俊成の研究』第2篇第3章二の(2)「上西門院女房徳大寺遺留歌贈答」項参照。

(2) 出雲路敬和氏『京都 古文化財細見記』(京都銀行協会、昭和五〇年)の「竜安寺」項、古代学協会古代学研究所編『平安時代史事典』(角川書店、平成六・四)の「徳大寺」「徳大寺家」項参照。なお、『続詞花集』巻第四秋上に、

九月十三夜徳大寺のおほいまうち君の仁和寺堂に人人きたり、歌詠みけるに　　八条入道太政大臣(藤原実行)

山の端に隠れば月の惜しきかな我が世の秋も更けぬと思へば(一九九)

とあり、また、『西行法師家集』には、

徳大寺の左大臣の堂に立入りて見侍りけるに、あらぬことになりてあはれなり、三条太政大臣歌詠みてもてなし給ひしこと、ただいまと覚えて、しのばるる心地し侍り、堂の跡あらためられたりける、さることのありと見えて、哀なりければ

亡き人の形見に建てし寺に入りて跡ありけりと見て帰りぬる(四二九)

という作なども見える。

(3) 『山家集』に、

遠く修行する事ありけるに、菩提院の前の斎宮に参りたりけるに、人人別れの歌つかうまつりけるに

さりともと猶逢ふことを頼むかなしでの山路を越えぬ別れは(一一四二)

同じ折、坪の桜の散りけるを見て、かくなん覚え侍ると申しける

この春は君に別れの惜しきかな花のゆくへを思ひ忘れて(一一四三)

返しせよとうけ給はりて、桧扇に書きてさし出でける　　女房六角の局

君がいなん形見にすべき桜さへ名残あらせず風さそふなり(一一四四)

という一連の歌がある。「菩提院の前の斎宮」は上西門院を指している。仁和寺の菩提院はいわゆる仁和寺の院家の一つであり、この菩提院などを念頭におかれた注であろうか。

(4) 『帝王編年記』、『女院小伝』、『平安時代史事典』の「統子内親王」項参照。『女院小伝』は「二条准母」とする。

(5) 森本元子氏『私家集の研究』(明治書院、昭和四一・一一)第四章「上西門院兵衛とその背景」、明治書院『和歌大辞典』の「上西門院」「讃岐」「美濃」項参照。「美濃」の項には「兵庫頭源仲正の女で、上西門院讃岐とも呼ばれた(和歌色葉)」としてその出自も記されている。六角の局は、注(3)に引用した『山家集』一一四四番歌作者。

(6) 注(1)松野陽一氏論文に同じ。文中「前記消息」とあるのは、「水鳥の歌入消息」と名づけられた俊成自筆の消息文を指す。

(7) 注(1)松野陽一氏論文に同じ。

(8) 和歌大系『長秋詠藻』に参考歌として引かれている。『山家集』上巻、五五七番歌と同歌であるが、『山家集』では第二句が「紅葉も散らぬ」となっている。

(9) 『歌ことば歌枕大辞典』の「冬」項参照。

(10) 「飛び立つ空がないことだ」とするものに、新日本古典文学大系『後拾遺和歌集』(久保田淳・平田喜信氏校注、岩波書店、平成六・四)がある。同書は「五月雨が降り続いて晴れ間のないことを指すか。」とも説明されいる。また、藤本一恵氏『後拾遺和歌集全訳注 一』(講談社、昭和五八・四)も「飛びたとうにも飛びたつ空がないことだ。」とするが、

「立つ空ぞなき」は難解で、鳥は秋に飛び立つもので、今は夏だから飛びかねているのか、巣を奪われたのでその巣に対する執心と愛着から空に飛び立ちかねているのか、また、上四句を序詞として、東宮時代の冷泉天皇に奉ったもので、特異な序詞で身の不遇を訴える(『後拾遺前後』)とする上野理氏の説に従うべきか、決定は容易でない。

と詳しく解説し、「飛び立ちかねている」場合の理由も推測されている。「空に飛び立ちかねているよ」とするものに、和泉古典叢書『後拾遺和歌集』(川村晃生氏校注、和泉書院、平成三・三)がある。

(11) 注(1)田村悦子氏論文に同じ。但し、松野陽一氏『藤原俊成の研究』は、俊成が女房達の歌に返歌をする形で贈答歌が成立した時期は、実能が没した保元二年の初冬の頃という一年に限定するという推定をされているので、それによれば「水鳥の歌入消息」が書かれたのは翌年の保元三年(一一五八)の春に限定して、俊成四五歳の春ということになる。

(12) 平安末期から新古今集時代にかけてのさかんな歌壇状況のなかで、「落葉」を初冬の歌題とする時代意識が現れ定着してゆくことについては、三澤小百合氏「『月詣和歌集』における『落葉』題歌群について」(日本文学研究、第四二号、平成一五・二)に詳しい考察がある。